

宮城県図書館蔵『近代百人一首』の翻刻と考察

松 本 麻 子

はじめに

宮城県図書館伊達文庫の中に『近代百人一首』がある。『近代百人一首』は、他にも『草花(化)百人一首』(宮城県図書館蔵伊達文庫・国文学資料館〈内題「草化集秀歌百人一首」〉)『秀歌百人一首』(ノートルダム清心女子大学附属図書館)、『武家百人一首』に合綴される『新百人一首』(無窮会神習文庫、足利義尚撰の『新百人一首』とは別の本)などといった書名で伝わる、紛らわしい本の存在がある。『新百人一首』の翻刻と紹介は、伊藤嘉夫氏が「異種百人一首十種——主として秀歌を輯めたもの——」(『跡見学園女子大学紀要』第五号、一九七二年三月)で行った。『草花(化)百人一首』と題される諸本には成立事情を伝える奥書はないが、文政一三年(一八三〇)に書写された『新百人一首』には徳川光圀撰の奥書がある。『新百人一首』よりも書写年代の古い伊達文庫本『近代百人一首』は、奥書によると光圀撰ではなく、中院通村撰とある。『新百人一首』と比べると和歌の排列が相違し、本文や作者名の異同も多い。そこで、本稿では、『近代百人一首』

全文の翻刻を掲載し、編纂者を含めた内容について考察を行うこととした。

『近代百人一首』は宮城県図書館本の他に、祐徳稲荷神社中川文庫本(以下中川文庫本)・大阪市立大学森文庫本(以下森文庫本)・多和文庫本・大阪天満宮本・住吉大社御文庫・国文学資料館蔵本などが伝わるが、いずれも写本である。中川文庫本と森文庫本には、『小倉百人一首』の作者が共に書き記されている。巻頭の作者である「後水尾院」の名の上に「天智天皇」と記され、以下同様に続いている。諸本のうち、極めて状態の良い宮城県図書館本の全文を翻刻し、成立年代や編纂者について考察を加えたい。中川文庫本・森文庫本・多和文庫本にて校合を行い、【補注】には重要だと思われる諸本の校異を付け加えた。翻刻にあたっては、濁点は加えず仮名はすべて原本のママとした。ヲドリ点・反復記号などもすべて原本通りとした。改丁の末尾には「印を、改行には／を付した。ただし、和歌に一〇百までの番号を私に加えた。

宮城県図書館蔵『近代百人一首』

【書誌】

宮城県図書館伊達文庫。番号、伊九一・二六四・五三。写本一冊。

外題、内題、題簽ともに、近代百人一首。「伊達伯観瀾閣図書」の朱印。表紙、藍色無地。料紙、楮。寸法、縦二七・〇糎×横一八・六糎。本文、墨付二〇丁、一面八行書、和歌一首二行書。奥書、「右百首／後陽成院依／勅十輪院通村撰之始者六十首／後四拾首撰而統之」とある。この奥書については、後述する。

【翻刻】

近代百人一首

後水尾院

- 一 天つ空くもりなきまてすむ月の／うつれる水の底もにこらし
後花園院上臈
- 二 春はた、花をあるしになしはて、／とはれぬうさも身にはかきら
逍遙院前内大臣
- 三 身のはてよいかに鳴渡にたつなみの／あはれしつけき時のまもな
称名院前右大臣
- 四 空よりや天のかはらにふくかせの／こゑをもおとす峯の瀧つせ

三光院前内大臣

中納言雅康

五 さそふにはおもふ袖もや有なまし／日数そ花のあらしなりける」

六 おほそらに山のはもかな暮やらぬ／春の日かけの中宿にせむ
前参議清純

七 つれなくて露はさなからあくる夜の／ひかりにおしき朝かほの花
澤庵法師

八 いかにしておもはぬ人をしのふらむ」／わすれてふ名の草もある
世に

九 春かせに水のこほりも打とけて／なかれもひろくうかふうろくす
祖心官女

一〇 法の水すめるこゝろのたのしみや／まつさきたちて夢にみゆら
坂津不守一

む

一一 ちらはまた花にうつらむうらみまで／かすめる月におもひ侘ぬ
権大納言政為

一二 たちならふかひこそなけれ山さくら／松に千年の色はならはて
僧正信玄

一三 あはすはとおもひなからもかた糸の／たえむとまては恨ざりし
後柏原院

を」

左大臣源秀忠

一四 呉竹のよろつ代までにいのるかな／あふくにあかぬ君かみゆきを

良純親王

一五 末とをくわけ行かたの野へにして／子をおもふき、す音をのみそ鳴

中納言

一六 かきりある秋のなかはもけふまでと」／いはぬはかりにうつる白きく

松平伊豫守綱政

一七 ともすれはしらぬむかしをなけくかな／けふをわする、こゝろならひに

榊原式部大輔政房

一八 世のほかのものとそ見る富士の根の／ゆきはさなから空につゝみて

匂當内侍

一九 きえかへりおしむこゝろやくれて行／おくる、霜と我もならまし

邦高親王

二〇 あけぬ秋のおもひをいかにくらふ山／やとりかるへき道はあれとも

元政法師

二一 くちねた、猶おりく／はとふ人の／こゝろにかゝる谷のかけはし」

本多丹後守重世

二二 年を経ていのるしるかつれなさを／うきみのとかと思ひしりきや

由良信濃守頼

二三 梅か枝に春雨にほふうくひすの／こえもこほる、花の下露

加能越前少将光高

二四 名古の海や浦やまかけてなかむれは」／やまとはあらぬ波のからしま

右大臣兼熙

二五 かきりなき御代にちきらん八千とせも／常磐堅磐の庭の呉竹

良恕法親王

二六 誰かさてかくともしらてすきなまし／うき身はなれぬ思ひのこして

廣橋大納言兼賢

二七 春ことにみとりを染る池水に／千とせ経ぬへき青柳のかけ

井上河内守正利

二八 時にあへはしはふのすみれそれさへも／朱を奪へるいろにそ有ける

松平對島守昭重

二九 雨夜にもさはらぬかけと見し月の／ひかすにくもる庭の卯花」

小出大和守吉英

三〇 ためしにもかきつたふへき文月の／はつかの夜半に初雁の聲

内藤左京亮義概

三一 泊瀬山入あひのかねはひ、けとも／尾上の雲に暮そまたる、

中川佐渡守久恒

三二 いさきよくすめるほとけの国たみを／なへておしへの道そひ
ろけれ

山名主殿頭矩豊

三三 御祓せしきのふの瀬々のしら波に／今朝はたちそふ秋の初かせ

戸田茂睡入道恭光

三四 けふといへは見ぬさかひなるかすみをも／宵なからしる春は来
にけり

山名隼人玉山入道茂豊

三五 秋も月もこよひなりけり入かたに／いてぬるほと天空をのこし
て

小堀遠江守宗甫

三六 山さとは軒はつゝきにみねのまつ／けふ立はるのかとにもてな
す

諏訪因幡守忠治

三七 しのゝめに今ひとこゑのほとゝきす／よし山のはに月は入と
も

御輝官女

三八 浦人のしほくむ袖もくちぬらん／いそのとまやの五月雨の比

権大納言雅親

三九 つく／＼とまもるともし火かきくらし／ひとり雨きく闇の夜ふ
かさ

大森信濃守正安

四〇 きく人のこゝろ／＼におとろかん／鳥はかはらぬあかつきの

こゑ

小出備前守英安

四一 春なから軒はのまつもしろ妙の／かすみもわかぬ今朝の淡雪

蜂須賀阿波守光高

四二 鈴鹿河八十瀧に落てゆく水の／なかれもはやし五月雨の比

轉法輪中納言公富

四三 思ひあまり寝られぬよはの雨のそら／あはれをとふや軒の玉水

権中納言為堅

四四 野をひろくわけゆく袖も濡ころも／夕くれふかき夏草の水

尊純親王

四五 いつをさてかきりならまし日にそひて／つれなき中に積る思ひ
を

左近衛少将藤原綱村

四六 此時にあふそうれしきあふけたゝ／ひしりの道も君かこゝろも

化了法師

四七 立わかれ我思ふことをふてにかき／こゝろに染て行橋のうへ

田村右京亮宗永

四八 ほさてたゝ袖にまかせむなみた川／なかれてつゐに逢瀬ある
やと

吉川唯足

四九 けふといへはうれしきものか総角の／むかしの春を思ひ出して

小出英直

五〇 一とせのゆくよりなをけふの日の／くるゝやとをき星合のそら

浅井備前守長政

五一 けふもまたたつねくらさむ山さくら／花に一夜の宿はなくとも

本多正照

五二 露の身のをくれさきたつならひそと／しりても袖のかはきやはする

毛利兵橋母

五三 あさましの老やとむかし見し人を／思へは今の我身なりけり

細川行高母

五四 いつのまに庭の萩はらこゑたて、／けさそ身にしむ秋のはつ風

烏丸大納言資慶

五五 和哥の浦や真砂子にたてる芦鶴の／あとある道にまとはすもかな

源光道卿室女

五六 おもふそよ逢見てのちもさはかりに／はては我さへつらからん身を

讃州源英卿妹

五七 故郷の人のこゝろもはつかしや／にしきにあらぬ墨染の袖

秋田安房守室女

五八 およひなき雲の上までゆくものは／月見る夜半のこゝろなりけり

會津少将室女

五九 けふはかり空にくもちの関もかな／花に吹くるかせやとゝめむ

瀬川采女正室女きく

六〇 かくあらん行衛をしらすたのみつる／我こゝろをは誰にかこたむ

伊達遠江守宗利女

六一 人ならはうき名やたゝん小夜更で／わか手まくらにかよふ梅か香

小出英直室

六二 おきわかれきえぬいのちを露はかり／そてにのこして暮をまちなむ

権中納言實任

六三 ひとりねの思ひふかめて夜とゝもに／やとるもおなし袖の月かけ

中院大納言通茂

六四 人はたゝつれなき中につれなくて／八千世をふるの神杉もなし

三楽齋室女

六五 いかにせんつれなきひとをこりもせぬ／身はあやにくになる、物から

公海法師 比沙門跡

六六 とふ人をまつこゝろさへうつもれて／道絶にけりゆきの山さと

松平大膳大夫息女

六七 時しもあれなみたたゝへてほとゝきす／なくや五月の天の下人

後奈良院

六八 草木にはいつふきいてむ秋ちかき／かせのやとりは閨のあふきを

正徹法師

六九 いかはかり子あらは我にそむかまし／親のいさむる道ならなく

に」

陽山法師

七〇 おしむともかひもあらしにちるはなの／身にたくへてや人の見
るらむ

日野大納言弘資

七一 うしや人なをことのはのこる夜の／あかしもはてすいそくわ
かれは

戸田恭光女

七二 花紅葉見しはきのふの春秋も」／むかしにふりぬ庭のはつ雪

侍従中納言通勝

七三 おくまゝに草のはつかに枯なして／我とすくなき庭の霜かな

伯三位雅喬王

七四 身にそふも中くつらし今はとて／おき出し床にのこるおもか
け

従三位資直」

七五 いろみつる(一字キ 多和文庫本で補)雁(一)のなみたはいかならむ／うつら
なくの、秋のしら露

二條関白康道

七六 ゆきはまたかきくらしふるとしのうちに／道ある世とや春は来
ぬらむ

後土御門院

七七 おきなさひあはれたへてもつ(諸本 鈞)かのいとの／よるさへ月に小
舟漕見ゆ」

齊藤撰津守三友

七八 花にうらみ袖にまたれてほともなく／身にしみかはる秋のはつ
かせ

飛鳥井大納言雅章

七九 御祓せしけふは名越といひなして／我恋せしのこゝろをやる

藤原 頼室

八〇 逢見ての後にものこることの葉を」／くれまつほとにかきやつ
くさし

九條左大臣道房

八一 松の葉の千世ふる御代の初ゆきに／あらはす色は君やそふらむ

道堅法師

八二 寢覚して浮世をひとりおもはずは／ゆめになされむ老や歎かん
細川玄巨法印」

八三 あなた(諸本 ち)そとうき世の夢やさめぬらむ／そのあかつきをまつ
のあらしに

羽柴若狭守勝俊長嘯子

八四 おくあみの中にやとれる月かけを／をのかものとや海人の引ら
む

龍泉法師

八五 枝高みおられぬまとの梅か香を／さそふはかりの春かせもか
な」

今西法師

八六 あはれさをこゝろにこめてしのふまに／恋といふことを人にし
らする

宗祇法師

八七 これやそのわかれとかよふ文字ならん／空に友なき春の雁かね

牧野息女

八八 めくりあふ秋の夜すからそでの月／かたふくまでをなかめける哉

嶋津忠貞室

八九 おもひきや朝夕なれしからころも／袖はなみたにくちぬものかは

藤原常友息女

九〇 いひよりは人めもよしや芦かきの／まちかき中をしのふくるしさ

近衛前撰政大臣

九一 君か経むいくとしなみのちきりをか／むすふみいけの氷ならなん

藤原本一室

九二 秋ならばあきのならひとたくれを／なかめすて、も袖の露けさ

関東右大臣源家光

九三 みゆきする我大君は千世経へき／千尋の竹のためしをそ思ふ

飛鳥井雅直

九四 色みてぬ月のひかりもしらいとに／つゝみて落る布引の瀧

夢想^{マヨ}国師

九五 いつまでと霜枯をまつ浅茅生に／よはらぬ虫の音さへはかなし

入道前大政大臣信尹

九六 せめてさは久米路のはしをかけそめし／中の契りのなさけと

もかな

中院前内大臣通村

九七 ちることもしそかさならむ山さくら／春におくる、こゝろなま(諸本)に

鳥丸大納言光廣

九八 あくる夜をおしかのつゝつかのまも／なつ野、草にやとる月かけ

後光明院

九九 見し秋もみさりしいろそ霜の上に／しもよりしろき冬の月影

後西院

一〇〇 つゐにいかに成ゆくみとはしら雲の／はる、ときなき思ひかなしも

右百首

後陽成院依 勅十輪院通村撰之始者六十首
後四拾首撰而続之

【補注】

- 一・後水尾天皇。文祿五年（一五九六）～延宝八年（一六八〇）。『新明題和歌集』四二三七。
- 二・三条冬子。嘉吉元年（一四四二）～延徳元年（一四八九）。
- 三・三条西実隆。康正元年（一四五五）～天文六年（一五三七）。『雪玉集』二二九九。
- 四・三条西公条。文明一九年（一四八七）～永祿六年（一五六三）。『雪玉集』六二七九、『称名院集』二二八三。

- 五・三条西実枝。永正八年(一五一一)〜天正七年(一五七九)。『三光院詠』四五五。
- 六・飛鳥井雅康。永享八年(一四三六)〜永正六年(一五〇九)。
- 七・未詳。
- 八・澤庵。天正元年(一五七三)〜正保二年(一六四五)。
- 九・祖心尼。天正一六年(一五八八)〜延宝三年(一六七五)。
- 一〇・未詳。ノートルダム清心女子大学附属図書館本『秀歌百人一首』には、『盲者』とある。
- 一一・下冷泉政為。文安二年(一四四五)〜大永三年(一五三三)。『碧玉集』一七一。
- 一二・武田信玄。大永元年(一五二二)〜天正元年(一五七三)。『集外三十六歌仙』三一、『和歌視今集』一一八、『刈谷本一人一首』二七、『歌林尾花末』一七四、『和歌山下水』六三三、『志多良』五八八。
- 一三・後柏原天皇。寛正五年(一四六四)〜大永六年(一五二六)。『柏玉集』一五六九。
- 一四・徳川秀忠。天正七年(一五七九)〜寛永九年(一六三二)。『和歌視今集』一〇一。
- 一五・良純親王。慶長八年(一六〇三)〜寛文九年(一六六九)。
- 一六・諸本「尾張中納言」。徳川光友光義か。ただし、光友の極官は権大納言。寛永二年(一六二五)〜元禄一三年(一七〇〇)。『新百人一首』には「尾張大納言光茂」とある。
- 一七・池田綱政。寛永一五年(一六三八)〜正徳四年(一七一四)。
- 一八・榊原政房。寛永一八年(一六四二)〜寛文七年(一六六七)。『刈谷本一人一首』三八〇、『若むらさき』一七三、『歌林尾花末』一四七四。
- 一九・四辻春子(一四三五〜一五〇四)か。
- 二〇・邦高親王。康正二年(一四五六)〜享禄五年(一五三三)。
- 二一・元政。元和九年(一六三三)〜寛文八年(一六六八)。『草山集』三二。
- 二二・本多重世。慶長八年(一六〇三)〜寛永一十九年(一六四二)。『刈谷本一人一首』三七八、『若むらさき』一四三、『歌林尾花末』一四六五。
- 二三・諸本「由良信濃守頼(繁)」。由良貞房(親繁)。寛永三年(一六二六)〜延宝二年(一六七四)。『近代一人一首』四二、『刈谷本一人一首』二二。
- 『若むらさき』一一三。
- 二四・越前は「筑前」の誤りか。諸本同じ。前田光高は筑前少将。元和元年(一六一五)〜正保二年(一六四五)。
- 二五・鷹司兼熙。万治二年(一六五九)〜享保一〇年(一七二五)。
- 二六・良恕法親王。天正二年(一五七四)〜寛永二〇年(一六四三)。
- 二七・広橋兼賢。文禄四年(一五九五)〜寛文九年(一六六九)。
- 二八・諸本排列、二九番・二八番の順。井上正利。慶長一二年(一六〇六)〜延宝三年(一六七五)。
- 二九・松平近陳(昭重)。寛永一五年(一六三八)〜享保四年(一七二〇)。『正本のかつら』二五三、『和歌視今集』一七二、『和歌継塵集』二二五、『和歌山下水』二二四。
- 三〇・小出吉英。天正一五年(一五八七)〜寛文六年(一六六六)。『鳥の迹』三九一。
- 三一・内藤義概(頼長、義泰)。元和五年(一六一九)〜貞享二年(一六八五)。『和歌視今集』四九三、『若むらさき』一〇三、『歌林尾花末』一四五八。
- 三二・諸本「道そひろけれ」↓「道は廣しな」。中川久恒。寛永一八年(一六四二)〜元禄八年(一六九五)。『刈谷本一人一首』一三三。
- 三三・山名矩豊。元和五年(一六一九)〜元禄一一年(一六九八)。『正本のかつら』四二一、『若むらさき』五八、『歌林尾花末』一四八六。
- 三四・戸田茂睡。寛永六年(一六二九)〜宝永三年(一七〇六)。『若むらさき』四。
- 三五・玉山(山名義豊)。元和九年(一六二三)〜元禄七年(一六九四)。『刈谷本一人一首』三七三、『若むらさき』七七。
- 三六・小堀政一。天正七年(一五七九)〜正保四年(一六四七)。
- 三七・諏訪忠晴か。諸本「忠治」、『刈谷本一人一首』「忠清」、『和歌視今集』に「因幡守源忠晴^{久員}」とある。諏訪忠晴は、寛永一六年(一六三九)〜元禄八年(一六九五)。『刈谷本一人一首』三六六。
- 三八・未詳。
- 三九・飛鳥井雅親。応永三年(一四一六)〜延徳二年(一四九〇)。『亜槐集』八八四。
- 四〇・未詳。
- 四一・小出英安。寛永一四年(一六三七)〜元禄四年(一六九二)。

- 四二・蜂須賀光隆。寛永七年（一六三〇）→寛文六年（一六六六）。『刈谷本
一人一首』三六八、『若むらさき』四九、『歌林尾花末』一四七〇。
四三・三条公富。元和六年（一六二〇）→延宝五年（一六七七）。『轉法輪中
納言』とあるが、公富の極官は右大臣。
四四・諸本「為賢」。藤谷為賢。文祿三年（一五九三）→承応二年（一六五三）。
四五・尊純親王。天正一九年（一五九二）→承応二年（一六五三）。
四六・伊達綱村。万治二年（一六五九）→享保四年（一七一七）。
四七・未詳。
四八・田村宗永（建題）。明暦二年（一六五六）→宝永五年（一七〇八）。『若
むらさき』一三三。
四九・吉川惟足。元和二年（一六一六）→元禄七年（一六九四）。
五〇・小出英直。慶安三年（一六五〇）→享保九年（一七二四）。
五一・浅井長政。天文二四年（一五四五）→天正元年（一五七三）。
五二・未詳。『若むらさき』一二五には「正昭」とある。本多正方（一六四
七→一六二九）か。
五三・毛利重行（重長）の母。生没年未詳。赤井弥平兵衛時直女。『正木のかつら』
一一一、『若むらさき』一八七。
五四・細川行孝（一六三七→一六九〇年）の母。
五五・烏丸資慶。元和八年（一六二二）→寛文九年（一六六九）。『秀葉集』
七五六。
五六・諸本「我さへ」→「神さへ」。松平光通の妻、国姫か。寛永二年（一
六三六）→寛文二年（一六六二）。
五七・松平頼重（一六二二→一六九五年）の妹。
五八・秋田盛季の妻、正寿院（安藤重長女）か。生没年未詳。『近代一人一首』
一五五、『刈谷本一人一首』一八三にはともに「長崎商家女」とある。
五九・保科正之の妻（一六一一→一六七二）か。
六〇・瀬川采女正の妻さく。生没年未詳。
六一・伊達宗利（一六三四→一七〇八年）の女。『近代一人一首』三三四には「伊
達政宗母」、『刈谷本一人一首』三六一、『若むらさき』一四には「宗利妻」
とある。
六二・小出英直（五〇）の妻。

松本麻子・宮城県図書館蔵『近代百人一首』の翻刻と考察

- 六三・諸本「やとるもおなし」→「やとるもつらき」。清水谷実任。天正一五年（一
五八七）→寛文四年（一六六四）。ただし極官は権大納言。
六四・中院通茂。寛永八年（一六三二）→宝永七年（一七一〇）。
六五・太田資正（一五二二→一五九一年）の妻。
六六・公海。慶長二年（一六〇七）→元禄八年（一六九五）。
六七・毛利綱広（一六三九→一六八九年）の女。『和歌観今集』八四一。『鳥
の迹』六一六。
六八・後奈良天皇。明応五年（一四九六）→弘治三年（一五五七）。『後奈良
院御集』五四七。
六九・正徹。永徳元年（一三八一）→長禄三年（一四五九）。『草根集』一〇
三五八。
七〇・未詳。
七一・日野弘資。元和三年（一六一七）→貞享四年（一六八七）。
七二・戸田茂睡女りん。生没年未詳。『刈谷本一人一首』三九三、『若むらさき』
九五、『和歌継塵集』四二四。
七三・中院通勝。弘治二年（一五五六）→慶長一五年（一六一〇）。『通勝集』
六五七。
七四・白川雅喬。元和六年（一六二〇）→元禄元年（一六八八）。
七五・富小路資直。生年未詳→天文四年（一五三三）。
七六・二条康道。慶長二年（一六〇七）→寛文六年（一六六六）。
七七・後土御門天皇。嘉吉二年（一四四二）→明応九年（一五〇〇）。『後土
御門御詠草』二〇〇。
七八・斎藤三友。慶長一八（一六一三）→承応三年（一六五四）。『和歌観今集』
二八四、『堀江草』四六一、『若むらさき』五九、『歌林尾花末』一五八一、
『和歌継塵集』一二六。
七九・飛鳥井雅章。慶長一六年（一六一一）→延宝七年（一六七九）。
八〇・未詳。諸本いづれも「藤原頼室」。
八一・九条道房。慶長一四年（一六〇九）→正保四年（一六四七）。
八二・道堅。生年未詳→享禄五年（一五三二）。
八三・細川幽斎。天文三年（一五三四）→慶長一五年（一六一〇）。『衆妙集』
六五六。

- 八四・木下勝俊（長嘯子）。永禄二年（一五六九）〜慶安二年（一六四九）。
- 八五・未詳。
- 八六・未詳。
- 八七・宗祇。応永二八年（一四二二）〜文亀二年（一五〇二）。『宗祇集』一七。
- 八八・未詳。
- 八九・島津忠貞室。生没年未詳。
- 九〇・遠藤常友。寛永五年（一六二八）〜延宝四年（一六七七）。
- 九一・近衛前久。天文五年（一五三六）〜慶長一七年（一六二二）。
- 九二・未詳。
- 九三・徳川家光。慶長九年（一六〇四）〜慶安四年（一六五二）。
- 九四・飛鳥井雅直。寛永二年（一六三三）〜寛文二年（一六六二）。
- 九五・夢窓疎石。建治元年（一二七五）〜観応二年（一三五二）。『正覚国師集』四九。
- 九六・近衛信尹。永禄八年（一五六五）〜慶長一十九年（一六一四）。
- 九七・中院通村。天正一六年（一五八八）〜承応二年（一六五三）か。『十輪院御詠』七〇。
- 九八・鳥丸光廣。天正七年（一五七九）〜寛永一五年（一六三八）。
- 九九・後光明天皇。寛永一〇年（一六三三）〜承応三年（一六五四）。
- 一〇〇・後西天皇。寛永一四年（一六三七）〜貞享二年（一六八五）。

【考察】

本書の奥書は、先に示したように、

右百首（中川文庫本右百首者）

後陽成院依（中川文庫本「勅院」） 勅十輪院通村撰之始者六十首

後四拾首撰而続之

とある。森文庫本はこれに続けて「干時元禄二己巳年正月」と年号が記されている。多和文庫には奥書がなく、「元禄二己巳正月撰之、後水尾院勅、撰者中院内大臣通村卿」とある。元禄二年は一六八九年

であり、これを成立年と見ると、中院通村は承応二年（一六五三）に没しているため、後陽成院の勅により撰んだという奥書の内容とは一致しない。諸本により奥書に異同があるため、成立年代の確定には慎重にならねばならないが、本書の内容から見ても中院通村とは考えられないのである。

入集者の年齢を確認すると、四六番の伊達綱村の生年は、万治二年（一六五九）。四八番の作者田村宗永（建顕）の生年も、明暦二年（一六五六）であり、承応二年に没した中院通村の撰とは考えられない。さらに、二五番の作者、鷹司兼熙は万治二年（一六五九）生であり、作者名に「右大臣兼熙」と記されている。兼熙は一六八三〜一六八九年まで右大臣、後に左大臣、元禄一六年（一七〇三）には関白となっていることから、本書の成立は元禄二年（一六八九）までと見ることができる。兼熙が右大臣であった最後の年が元禄二年であり、一番若い作者もこの時期には三〇歳前後となることから、ひとまず成立は元禄二年と考えてよいように思われる。ノートルダム清心女子大学本『秀歌百人一首』は正徳二年（一七二二）に書写されたとあり、これも矛盾しない。

奥書で撰者とされる九七番の中院通村の歌は、注で示したように『十輪院御詠』にも見えるものである。『十輪院御詠』は中院道秀の歌集であり、通村が撰者であれば別人の和歌を自分の歌として選ぶはずはない。このことから、奥書には「後陽成院（多和文庫本は後水尾院）」の「勅」により、「六十首」を通村が撰んだと記されるが、百首のうち六〇首の撰に関わったということも、難しいのではないかと思われるのである。

ほぼ同時代の後水尾院や霊元院歌壇のメンバーとしてよく知られる公家歌人も入集していない。例えば、後水尾院歌壇で活躍した三条西実教、日野資勝・光慶父子、鷹司房輔ら、霊元院歌壇の有力歌人であった鳥丸光雄、日野資茂ら、多くの公家歌人はこの『近代百人一首』に選ばれていないことがわかる。つまり、公家歌人が撰者である可能性は低いと言つてよいだろう。

伊藤嘉夫氏が紹介された『新百人一首』の奥書には、次のように記されている。

此百人一首ハ世に新百人一首と号して水戸義公の撰也と云。文政十三年十二月三蔦六郎政行の蔵書を以て写之。

阿部 正信

この奥書によれば、この百人一首は「水戸義公」つまり徳川光圀撰とある。光圀は寛永五年（一六二八）～元禄二三年（一七〇〇）の人であり、『近代百人一首』の成立年と推測される元禄二年には存命で年代にも問題はない。しかし、光圀自身の和歌がとられていないことや、寛文五年（一六六五）頃に水戸に招聘された山本春正（一六一〇～八二年）、春正と共に水戸へ下った清水宗川（一六一四～九七年）、光圀の依頼により作られたという『万葉代匠記』の作者契沖（一六四〇～一七〇一年）、といった光圀に接した文芸好士の名が『近代百人一首』に見られないことは不審である。

山本春正が撰者の一人とされる『正木のかつら』には、延宝二年（一六七四）付の序文がある。『正木のかつら』に見える和歌と同じものが、『近代百人一首』にも幾つか入っている。しかし二九番歌の作者は「松平對島守昭重」とあるが、『正木のかつら』では「源正明（建

部丹波守）」とある。つまり『近代百人一首』の編者は『正木のかつら』を見ていたと言いがたい。このような事情から鑑みても、『近代百人一首』が徳川光圀の撰、もしくはその水戸歌壇周辺での成立とすることは難しいのではなからうか。

それでは、撰者は誰なのか、といった問題について考えてみたい。戸田茂睡（一六二九～一七〇六年）の手によると思われる歌集に、『若むらさき』がある。この『若むらさき』に所収される和歌二二二首のうち、『近代百人一首』と同じ歌は一四首である。『近代百人一首』には戸田茂睡（三四番）、茂睡女（七二番）の歌が入集している。また、茂睡は従兄の山名義豊（玉山）の詠を中心に七百余首を集め『鳥の迹』を編纂したが、この玉山（三五番）や弟の山名矩豊の歌（三三番）も『近代百人一首』に見える。

『近代百人一首』には、近世初期の歌書にほとんど取り上げられることのない小出姓の歌人が四人も入集している。小出吉英（一五八七～一六六六年、三〇番）や孫の英安（四一番）、英安の弟英直（五〇番）、英直室（六二番）である。『近代百人一首』の撰者は小出氏と密接な関わりがあると推測できる。この小出吉英詠と同じ歌が茂睡の編纂した『鳥の迹』三九一番に採られている。『近代百人一首』の歌とは同じものではないが、小出英安や同じ小出氏の英長・英輝（両者ともに『近代百人一首』には採られていない）の歌が『鳥の迹』に見えるのである。

『近代百人一首』には『若むらさき』と共通する歌が多いこと、また戸田茂睡や茂睡女の歌が入っていること、『鳥の迹』に縁のある玉山や弟の山名矩豊の詠も『近代百人一首』に見えること、小出氏の歌

が『鳥の迹』にも多く見られること、などから『近代百人一首』は戸田茂睡に近しいところで成立した可能性が考えられる。『近代百人一首』と類似する『草花(化)百人一首』についてもさらに考察する必要があるだろう。『近代百人一首』の詳細に関しては、今後の報告としたい。また、未筆ながら、貴重な資料の翻刻をご許可くださった宮城県図書館に感謝申しあげたい。

※『近代百人一首』作者の成没年や官職等については、『国書人名辞典』『公卿補任』『尊卑分脉』『寛政重脩諸家譜』によった。また、他出和歌の番号については、『新編国歌大観』『私家集大成』『近世和歌撰集集成』『長嘯子全集』(古典文庫)『烏丸資慶家集』(古典文庫)によった。

〈付記〉

本稿は平成二五年度科学研究費助成事業(学術研究助成基金助成金課題番号:25884055)の研究成果の一部をまとめたものである。

(まつもと あさこ)／日本文学)